

# アメリカのバイオエシックス

— アメリカ留学から学んだこと —

足立智孝  
足立朋子

## 目次

- 一 はじめに ニテイズプログラム
- 二 バイオエシックスとメデイカルヒューマニティーズ (Medical Humanities) 四 アメリカのバイオエシックス学会報告
- 三 ドゥルル大学大学院メデイカルヒューマニティーズ 五 おわりに

## 一 はじめに

私たち (足立智孝・足立朋子) は、バイオエシックス (生命倫理学) を学ぶために、一九九七年五月にアメリカに渡り、一九九八年八月までの一年三ヶ月間、首都ワシントンDCにあるジョージタウン大学ケネディ倫理研究所 (The Kennedy Institute of Ethics Georgetown University) <sup>(1)</sup> に在籍した。

ケネディ倫理研究所は、故ケネディ大統領の両親の援助により一九七一年に設立され、生命倫理の政策問題に関する倫理的視点を提供する、アメリカで最も歴史、実績のある教育、研究機関の一つである。当研究所の教授陣は、ジョージタウン大学において大学、大学院コースのバイオエシックス関連科目もあわせて担当している。また当研究所では、バイオエシックス集中コース(Intensive Bioethics Course)が毎年六月初旬に行われ、二〇〇一年で二七回目の開催となる。ケネディ倫理研究所には、世界各国から客員研究員を受け入れる教育、研究プログラムがあり、私たちが、そのプログラムの研究員として在籍した。

ケネディ倫理研究所には、世界中の倫理に関する文献を収集したバイオエシックス図書館(The National Reference Center for Bioethics Literature)がある。ここでは、バイオエシックスデータベースを検索できるバイオエシックススラインをもち、インターネットを通して世界中のどこからでも、アクセスが可能である。同研究所は、アメリカ国内は勿論のこと、世界に向けて、バイオエシックスに関する研究成果を発表し続けている。

また一九九八年九月からニュージャージー州マディソン市にあるドゥルル大学大学院メディカルヒューマニティーズ(Medical Humanities: 医療人間学、以下MHと略す)プログラム(Caspersen School of Graduate Studies Drew University)に在籍し、二〇〇〇年一二月に修了し帰国した。本稿では、私たちの個人的経験を通して、アメリカにおけるバイオエシックスの一端を紹介する。最初に、私たちが学んだMHについて、バイオエシックスとの関連、登場背景、大学院のコースプログラムなどを紹介し、最後に、私たちが参加したアメリカのバイオエシックス学会の報告をする。

## 二 バイオエシックスとメディカルヒューマニティーズ(Medical Humanities)

現在、アメリカの大学院において、バイオエシックス専攻で学位取得をするためには、大きく分けて三つのコースがある。第一は、哲学・倫理学、神学など形而上学を基礎として学ぶコース<sup>(4)</sup>、第二は、メディカルスクールと関係した臨床実践的なプログラムで学ぶコース<sup>(5)</sup>、そして第三は、MHプログラムで学ぶコースである。私たちが三番目のMHプログラムにおいて学んだ。

まず、日本においてほとんど知られていないMHプログラムの紹介は、アメリカにおいて最初にMHプログラムを大学院に創設した、テキサス大学医学部門(University of Texas Medical Branch、以下UTMBと略す)のMHの紹介に、大きな手がかりを得ることができる<sup>(6)</sup>。

MHとは、学際的な学問分野であり、一九七〇年代前半から登場してきた。この新しい試みがなされたのは、近年の急速な社会変革、技術革新により、医学と関連する医療従事者、科学者、教育者が自分自身の行うべき仕事に対して、道徳的、概念的、あるいは法的根幹の再検討を要請されたからである。臨床実践の倫理道徳問題、責任感の危機、医療での法律の顕在化、医療構造改革、マネージドケア、医療の公平性、大量かつ専門化した医科学知識の爆発的な増加に関する認識などの問題が、MH領域の研究や教育を活発にしている<sup>(7)</sup>。

今日では、医療倫理、そして医療史などは医療・保健の学術機関では一般的に教えられている。MHプログラムは、多くの医学部に開設されており、医療倫理(Medical Ethics)、科学哲学(Philosophy of Science)、医療史(History of Medicine)の大学院教育プログラムも増加している<sup>(8)</sup>。

MHは学際的な学問分野であること、そして登場した時期、時代背景などは、極めてバイオエシックスと類似している。さらに、MHは、バイオエシックスを含め、医療あるいは生命医学に焦点を絞り、様々な学問分野・方法論(例えば、歴史学、哲学、社会学、文化人類学、心理学、文学、宗教学、法学など)からのアプローチにより構成されている。バイオエシックスは、MHプログラムの中核をなす科目であるが、MHプログラムそのものではないことに留意したい。

MHプログラムの歴史を見ると、初めは医学部の医学教育プログラムの一環として始まっている<sup>(8)</sup>。それに加えて、MHプログラムを担う人材育成のため、あるいは既存の専門(例えば、医師、看護婦、またはソーシヤルワーカー等々)を異なる視点からさらに深く学びたい人々のために、大学院でのMHプログラムが、一九八八年にUTMBでスタートした<sup>(9)</sup>。

### 三 ドゥルー大学大学院メディカルヒューマニティーズプログラム

私たちが学んだドゥルー大学大学院・MHプログラムは、UTMBに続いて出来たメディカルスクール以外に設立されたプログラムである。このプログラムには、以下の三つの必修科目がある。

#### 医療倫理 (Biomedical Ethics)

医療倫理 (Biomedical Ethics) では、最初に議論の基本になる倫理理論(義務論、功利主義、個人主義的自由主義など)、そしてバイオエシックスの基本原則(自律尊重、仁恵、無危害、正義)の理解が要求された。その上で様々な医療における、倫理問題や道徳ティレンマの解決策を導き出すための応用力を学ぶ。

#### 医療の中の語り (Medical Narrative)

医療の中の語り (Medical Narrative) では、死、病気などを主題とした、患者、あるいは医師が主人公の文学作品(詩など)を読み、患者とはどのような状況におかれた存在なのか、人の死とは何か、あるいは健康とは何かを考察した。それに加え、医療における倫理問題を倫理・哲学理論により解決策を探すだけでなく、それだけの問題には、それぞれ個別的な状況や価値観が深く関係していることを文学、小説、映画等を通じて、患者、医療者、家族等の「語り」(narrative) から認識することができると学ぶ。多くの物語や詩を読み、時には演劇や映画を観て、それぞれの登場人物は何を語っているのか、そこに隠された意味は何かを、想像力を働かせ、より敏感に感じ取れるようになることが求められる。「語り」の事実と意味を読み取ることにより、倫理問題・道徳ティレンマを解決するための重要な要因であること理解する。

#### 臨床実習 (Clinical Practicum)

ドゥルー大学のMHプログラムディレクターが行っている、ある病院の研修医に対するMHプログラムに参加する。そのプログラムの中には、大学院で習った医療倫理 (Biomedical Ethics)、医療の中の語り (Medical Narrative) クラスに相当する授業もある。また、病院内のバイオエシックス委員会、倫理委員会などの各委員会に出席し、病院内で起こっている倫理問題が、どのように話し合われているかを見聞した。医師、研修医と共に、病院内の回診、症例検討会などのカンファレンス、A&E (Emergency Room: 救急治療室)、I&RB (Institutional Review Board: 施設内審査委員会)、ICU (Intensive Care Unit: 集中治療室)などを回り、医師業務の見学を行う。病院で何が行われているのかを目の当たりにすることにより、クラスで学んだことを、現実の問題として捉えることができた。また、研修医との会話や病院内の雰囲気を通して、MHプログラムの重要性を知る貴重

な機会になった。

以上の必修科目により、倫理問題を倫理理論の側面から、そして患者とその医療者や家族の価値観や感情の側面の両方から理解することができ、さらにそれらの側面を実際の医療現場に触れることで、一層理解を深めることのできるプログラムになっている。すなわち、倫理理論、人間の「語り」を理解し、実際の医療現場を経験し、メディカルヒューマニスト (Medical Humanist) として養成される<sup>3)</sup>ことが、このMHプログラムのねらいであり、特徴であった。

その他以下のような選択科目があるので簡単に紹介する。

医療文化人類学 (Medical Anthropology)

文化の違いが医療システムに与える影響、文化間での健康、病気の概念の違い等を学ぶ。

文化医療史 (Cultural History of Medicine)

古代ギリシヤ、エジプト、中世ヨーロッパの医療から、現代の最新医療までを、文化の視点から捉える。

生物医科学と未来 (Biomedical Science and the Future)

現代の生命科学技術の問題、たとえば、遺伝子技術、ナノ技術、代替医療、環境問題、人口問題、プラセボ効果、人工知能、安楽死、癌治療などを通して、未来の社会を考える。

医療倫理上級セミナー (Advance Seminar in Biomedical Ethics)

倫理理論、特に規範倫理理論の理解を前提にし、学生自ら、研究テーマを設定し、発表・議論を行う。

心理分析 (Psychoanalysis: Understanding the Emotional Origins of Violence)

人はなぜ感情的になり、攻撃、さらに加熱して暴力を振るうのかをフロイト理論などの基本理論を学びながら、

アメリカ社会の暴力問題について考察する。クラスでは新しい暴力の形態として、オウム真理教の問題も取り上げられた。

臨床倫理 (Clinical Ethics)

医療現場で直面している倫理問題、例えば、インフォームドコンセント、医師自殺補助、不足医療資源の配分、臨床試験、がん告知などについてディスカッションを行う。また、実際に病院で生じているケースを取り上げて、解決策を探る。

これらのクラスならびに病院実習で学んだことを踏まえ、各自が選択したテーマで修士論文を仕上げることになる。

これらのプログラムで学ぶ中で、筆者(足立智孝)は、ヒトゲノムプロジェクト (Human Genome Project) が医療を含む、私たちの社会に与える問題に関心をもった。例えば、「文化医療史」クラスでは、遺伝子概念の登場背景を探るため、メンデル (Johan Gregor Mendel (一八二二—一八八四)) の人物研究を行い、遺伝概念登場とともに現れた優生思想 (Eugenics) の歴史、あるいは、遺伝子治療の歴史を研究した。また、「医療文化人類学」では、病気の概念が文化によって異なり、遺伝病についての概念を人類学的視点から学ぶことができた。「医療倫理」、「臨床倫理」クラスにおいては、遺伝子に関する倫理問題の重要性を再確認し、「生物医科学と将来」クラスでは遺伝子技術がもたらす影響について詳しく知ることができた。このような中で、筆者は、ヒトゲノムプロジェクトにより、私たち人間はどんな未来に生きるのか、という主題を得た。

法的なアプローチのみによる倫理問題解決の難しさについて注目した。その疑問に答えてくれたのが、「医療の中の語り」クラスだった。医療に携わるすべての人々（患者、医師、看護婦、家族等）の「語り」の中から、それぞれの価値を見出し、倫理的・道徳的問題を解決していこうとする一つの方法である。医療技術の進歩により非人間化された医療状況が多く見られるようになったが、各患者や医療者の身体的側面だけでなく、社会的・経済的・精神的な個別性を尊重することの大切さを、「語り」の中から学んだ。それに加えて、医学教育の中のバイオエシックス教育においても、文学などの「語り」を読むことにより、医療従事者の倫理性を養うために効果的な方法であることにも、関心を持った。

#### 四 アメリカのバイオエシックス学会報告

ここでは、私たちの参加したアメリカ・バイオエシックス・ヒューマニティーズ学会 (American Society for Bioethics and Humanities、以下ASBHと略す) について報告する。ASBHは、それまで分かれていた三つのバイオエシックス関連学会が一九九八年に統合されて誕生した比較的新しい学会である。

ASBHの設立目的は、臨床、あるいは大学などの研究・教育機関でバイオエシックスに携わっている人々、また医療に関係した人文学 (Humanities) に従事している人々の中で、様々な専門分野・職業種間の意見交換を行い、学際的研究、教育、政策、専門職の発展を促進させることである。この目的を達成するために、以下の活動を行っている。

- (1) ヘルスサーヴィス・ヘルスケア専門職に対しての教育・研究に関連した、人間価値の様々な問題を考察する
- (2) 人間価値に関連する問題を扱う教育ミーティングを行う
- (3) 上記の関心領域の研究を促進する
- (4) 学会と公共政策との関わり等の問題も含め、公共の議論に貢献する

私たちは、在米中に二度ASBH年次総会に出席した。ここでは、昨年行われた第三回年次総会を中心に述べる。第三回総会は、二〇〇〇年一〇月二六日から四日間の日程で、ユタ州ソルトレークシティで開催され、登録者リストによれば、総勢五四二人が参加した。年次総会は、全体セッションが四題（基調講演二題、次期会長講演、昼食を取りながらの講演）、二日間のポスターセッション、同時並行して常に六つの会場で、論文セッションあるいはパネルセッションが行われた。また、様々なテーマについての関連ミーティングが、早朝あるいは、セッション終了後に開催されていた。これらのミーティングは、同じ関心事をもつ者同士の情報交換の場、あるいは親睦の場として活用されていた。ミーティングの数は有志の参加者により、年々増えている。

学会全体を通して、女性の活躍が印象的であった。全てのセッションの発表者にはほとんど女性が含まれており、私たちが参加したセッションも例外ではなかった。ASBHの歴代会長、五人（二〇〇一年度の選出者も含む）のうち四人が女性であることも女性の活躍が学会を支えていることを示している。

そして、この学会は他の学会と比較して、とても友好的雰囲気にも包まれていた。一九九九年度の学会長を務められた、現ヘイスティングスセンター所長のマレイ教授 (Dr. Thomas H. Murray) が私たちに、「この学会は、他の学会と比べて、誰に対しても好意的ですので、何でも質問すると良いですよ」とお話し下さったのが思い出される。このことは、学会で、次世代の専門家を育成しようという意図のプログラムとして現れていた。

その一つのプログラムとして、メンターリングセッション (Mentoring Sessions) があつた。これは、希望する学生、若手研究者が、著名な研究者と時間を共有するもので、十数人のメンターの中から自分の関心分野のメンターを選択し、一緒に昼食をとりながら指導を受けることができるプログラムだった。学生、若手研究者はもちろんのこと、この時間を大変楽しみにしているメンターもいるそうだ。

また、若手研究者、学生に経済的な援助をする制度 (Early Career Scholars Travel Support) があつた。発表者に対する援助だけでなく、遠方から大会に参加する学生、若手研究者へ参加費、交通費の一部が援助される。私たちもアメリカ東海岸からユタ州まで、ほぼアメリカ大陸を横断する形で参加に最初は躊躇したが、幸いにもこの制度から援助を受けることができ、学会へ参加することができた。

さらに、学生を対象とした懸賞論文が公募されていた。その中から最優秀賞 (Student Paper Award) が選出され、総会で表彰されるとともに奨学金が支給され、そして年次総会で論文を発表する機会が与えられていた。全ての学生に、修士・博士論文を含めて専門雑誌等に未発表の論文を投稿する機会が与えられているのである。時には学び続けることに、経済的にも精神的にも困難を伴うこともあろうが、私たちのような若い学生や研究者に機会を与え、援助し、そして励ます、温かい雰囲気のある学会であり、このような学会に参加できたことは貴重な経験となった。

そして、学会自体が社会の中のオピニオンリーダーとして大きな役割を担っている、という自覚を多くの参加者が抱いていた。医学に関する学術・研究分野において、常に新しい生命倫理問題が生じていることもあり、多くの倫理的問題に対し、それらの議論を広く一般社会に投げかけ公共の議論にまで高めようと、社会へ様々な情報発信する姿勢に満ち溢れ、活気のある学会であつた。

## 五 おわりに

帰国後すぐに、モラロジー研究所研究センターの水野修次郎研究員から、「アメリカのバイオエシックスの現状を報告してください」とのお話を頂いた。しかし、「アメリカのバイオエシックス」といっても様々な形態をとりながら、常にダイナミックに「動いている」ということ、私たちの経験したバイオエシックスは、私たちの個人的な経験によるほんの小さな側面でしかないことを懸念した。しかし、私たちが個人的に学んだことを手がかりに、アメリカにおけるバイオエシックスの一部を紹介できればと考え、まとめたものが本稿である。

帰国後、アメリカのバイオエシックスを振り返った時、アメリカのバイオエシックスは「動いている」という印象が強い。第一は、学術・研究面におけるものである。科学技術の進歩により、常に新しい生命倫理問題が生じ、それらの問題に対して、どのように対応すればいいのか、という議論を広く公共の議論にまで高めようとしていた。これはバイオエシックスに関連する人々がオピニオンリーダーとしての自覚の強さをあらわしている。第二に、教育面では常に「想像力」を働かせ問題に対応できる人材を育てるプログラムを目指していた。新しい問題へも対応できるようになることとともに、どのような関連問題が生じるか、を考える機会を提供している。このように、時代の要請に合わせたプログラムを構成するためには、「想像力」と「創造力」が大切であり、バイオエシックス、あるいはMHプログラムはまさにその産物であり、今もまさに発展しながら「動いている」のである。

最後に、バイオエシックスは我が国において、どのような役割を担っていくのであろうかについて考えてみた。アメリカにおいてもそうであつたように、今まで以上に日本でも公共政策成立の過程で、バイオエシックス

は大きな働きをするようになるであろう。そして、バイオエシックスが社会の中における様々なレヴェル間の潤滑油になると考えられる。なぜならば、バイオエシックスとは単に最先端医療における倫理的・哲学的考察を行う学問や政策であるだけでなく、私たちの日々の生活で起こる問題をも扱うからである。バイオエシックスの問題を媒体に、市民の意見を国家政策に、そして政策が市民へ相互作用することが可能であるし、また、可能にしていく社会システムを構築しなければならない。

バイオエシックスは、時には学問として、時には運動 (movement) として、社会全体を巻き込んでいく。そのためにも、専門家を養成するための体系的なバイオエシックス教育プログラムを充実させることが必要である。その教育プログラムで学んだ人々が、病院等の臨床現場で働く医療従事者と一緒にバイオエシックス問題を考え、さらに医療従事者に対するバイオエシックス教育を担うのである。

今後バイオエシックス議論の継続的な高まりとともに、様々なレヴェルにおけるバイオエシックス教育の必要性、そしてメデイカルヒューマニティーズ (Medical Humanities) プログラムの重要性が認識されることを願っている。

\*モラロジー研究所研究センター水野修次郎研究員からは、本稿執筆の機会、ならびに貴重なコメントをいただいた。また、麗澤大学教授・モラロジー研究所研究センター立木教夫先生からは、初校から丁寧に読んでいただいた。最後に、早稲田大学人間科学部木村利人教授は、私たちのアメリカ留学の道を拓いてくださり、また帰国後は、早稲田大学大学院木村ゼミで「アメリカでバイオエシックスを学んで」と題した話をする機会を与えて下さり、本稿を作成する上で大変貴重な時間になった。ここに記して感謝いたします。

#### ＜註＞

- (1) ホームページアドレスは <http://www.georget-own.edu/research/kie/>。
- (2) ホームページアドレスは <http://www.drew.edu/grad/area/med/index.html>。
- (3) ナネディ倫理研究所の正式名称は「二人の名を冠して The Joseph P. and Rose F. Kennedy Institute of Ethics」である。
- (4) ショージタウン大学大学院・哲学部のバイオエシックスコースはその代表例である。
- (5) 例えば、ケースウェスタン・リザーブ大学の修士課程 (Case Western Reserve University Master of Arts in Bioethics) 中のカテゴリーに入る。詳しくは「回大生バイオエシックスセンター (Center for Biomedical Ethics) のホームページ <http://www.cwrn.edu/med/bioethics/bioethics.html>」を参照。
- (6) これら二つのカテゴリーに全てのバイオエシックスコースを厳密に区分することはできないが、バイオエシックス専攻で大学院を選ぶ際の一つの参考にするこゝとができる。バイオエシックスを学ぶことの出来る大学院は、ペンシルヴァニア大学バイオエシックスセンター (University of Pennsylvania Center for Bioeth-
- (7) デキサス大学医学部門生物医科学系大学院 (University of Texas Medical Branch at Galveston Graduate School of Biomedical Sciences) カタログ <http://registrar.utmb.edu/pdf/GSBS.pdf> 29頁を和訳。括弧は筆者が補足。
- (8) 現在、全米では約10の医学部にMHプログラムがある。詳しくは「ニューヨーク大学医学部 (New York University School of Medicine) Medical Humanities Directory and Points of Contact」ホームページ <http://endeavor.med.nyu.edu/hit-med/directory/index.html>」を参照。
- (9) ここで紹介するのは、私たちが選択したクラスの一部である。
- (10) 二つの学会とは「The Society for Health and Human Values (SHHV)」, 「The American Associa-

tion of Bioethics (AAB), The Society for Bioethics Consultation (SBC) による。

(11) ASBH ホームページ (http://www.asbh.org/about/history.htm) 参照。

(12) ASBH ホームページ (http://www.asbh.org/about/purpose.htm) 参照。

(13) 第三回年次大会では、以下の21の分野にテーマが あった。(順不同)

ホスピスと緩和医療 (Hospice and Palliative Medicine) / 人種と文化 (Race and Culture/Ethnicity) / 学生の関心事 (Student Interest) / 環境倫理 (Environmental Ethics) / フェミニズムのフェミニストアプローチ (Feminist Approaches to Bioethics) / 研修医の関心事 (Residency Interest) / 法律とバイオエシックス (Law and Bioethics) / 女学生と医療 (Literature and Medicine) / 哲学 (Philosophy) / リハビリテーション倫理 (Rehabilitation Ethics) / 宗教 / 精神性とバイオエシックス (Religion, Spirituality, and Bioethics) / ユニバーサルバイオエシックス (Jewish Bioethics) / 看護 (Nursing) / 整骨医学 (Osteopathic Medicine) / 医学教育プログラムディレクター (Program Course Directors of Humanities

and Bioethics Program in Health Professional Education) / 研究 (Research) / 理論医療 / 医療哲学 (Theoretical Medicine/Philosophy of Medicine) / 歯科倫理 (Dental Ethics) / 医療倫理史 (History of Medical Ethics) / 視覚芸術と文化 (Visual Arts and Cultural Representations) / 組織倫理 (Organization Ethics) である。

(14) 早稲田大学人間科学部木村利人教授は、「人権運動」と結びついた形で、「バイオエシックスが登場したことを踏まえ」、「いのちを守り育てる運動」として、バイオエシックスを提唱されている。詳しくは、木村利人、「バイオエシックスの展開をめざして——いのちを守り育てるために——」、「新しい生命倫理を求めて」(北樹出版、一九八九年) 37-60頁を参照。